百石詣啣と灌仏会

小林 眞由美

仏生日の四月八日に行う灌仏会は、現代では「花祭り」として全国各宗派の寺院で行われている。季節の花で飾った花御堂の中に、あどけない姿の誕生仏を据え、参拝者が甘茶をそそぐ。甘茶の風習は近世より始まったらしく。古くは経典に従い、温涼二水や五色の香水を用いていた。

灌仏会は、釈迦降誕の伝説に由来している。釈迦牟尼は、浄飯王と摩耶夫人的子・悉達太子として出生した。摩耶夫人は月が満ちる頃、毘毘尼園に赴いた。

無憂樹の花の枝に右手を伸ばし摘もうとするやいなや、太子が夫人の右脇より安らかに誕生した。太子は樹下に生まれた蓮華の上に墮ちると七歩歩み、右手を挙げて「我、一切の天人の中に於いて、最尊最勝なり。無量の生死、今に於いて尽く。この生に、一切の人天利益せん」という偈を説いた。その後、四天王帝釈天・梵天が現れた。
て太子に侍し、二篤王が虚空より清浄の温水と涼水を太子の身に濁いだ（過去現在因果経巻一より）。

仏生日は二月八日と四月八日の二説があるが、日本では四月八日の説をとることが多い。インドでは仏生日に
は仏像のほかに、仏像を車に納めて巡行する「行像」、なども行われていた。中国の渡仏会は、後趙の石勒が毎
年四月八日に寺に詣でて渡仏、子のために発願したのが濁やとされる（高僧伝巻九）と。唐ででは、渡仏も行わ
れていたが、仏生日ちらんで受戒や仏像供養などの種々の行事を行うことの方が多いという。

渡仏会は東漢に始めて盛んになったようである。

「日本書紀」によると、推古十四年（六〇六）四月八日に元興寺に仏像を安置し、この年より四月八日と七月十
日を元興寺の金堂に坐せしむ。時に仏像、金堂の戸を破して納める」という。

十四年（六〇八）の夏四月の乙酉の朔壬辰に、鈴を生の銅の仏像、並に造りまさり観に。是の日に、丈六の銅の像
を元興寺の金堂に坐せしむ。時に仏像、金堂の戸を破して納める」という。然るに鞍着の秀れた工なること、戸を破らずし
て堂に入ること得。即日に、設仏す。是に、会集へる人衆、勝けて数ふべからず。是年より初めて寺毎に、

四月の八日、七月の十五日に設仏す。
百石讃嘆と灌仏会

「元興寺伽藍縁起」には、「仏教伝来の際に百済国聖明王より太子像と灌仏具などが奉納されたとする。誕生仏

飛鳥時代からの作例が現存し、東大寺には、天平勝宝四年の大仏開眼会に使用されたかという五〇種近い大型

の誕生仏及び灌仏盤が伝えられている。大安寺と法隆寺の「流記資材帳」には種々の灌仏具が記されている。奈良時代には諸大寺において灌仏会が盛大に催されていたことが窺われる。

平安時代に入り、承和七年（八〇〇）に、宮中において元興寺僧律師静安によって初めて灌仏会が行われた。

永観二年（九八四）に源為憲によって著された「三宝絵」僧宝の巻の「灌仏」には、宮中における灌仏会の創

始や灌仏の由来などについて、「僧像絵」の偈及び「百石讃嘆」が記されている。「讃嘆」は、「法華讃嘆」、「舎利讃嘆」、三種に数えられている。「三宝

絵」が、『百石讃嘆』の初出である。

承和七年四月八日、清涼院ニントヘル市の御灌仏ノ事ヲ行ハシメフ。律師静安、灌仏経ニトケル旨

ヲモノテ、ソノアルベキ事ヲ奏ハシ定ム。ヤガテ日々ノ御導師ヲツカマツラル。コロヨニ後ニヒロマレリ。殿

上日記ト。二見ベタリ。灌仏像絵ヲ手、十方ノ仏ハハミナ四月八日ヲモテ生レフフ。春夏ノ間ニシテヨロ
（甲斐田山

（千葉県

（十一郎『珊廻”。）

（十一郎『珊廻』）

（十一郎『珊廻』）
百石讃喫と灌仏会

「百石讃喫」の出典について従来、「中陰経」と「地獄観経」が挙げられているが、一方で、和讃讃の定数律化にともなって成形されたのが「三宝経」の形式ではないかという考えもある。

若し悪男・悪女、母の恩を報ぜんが為に、一劫を経て毎日三時、自身の肉を剝ぎて以て父母を養ふも、而も未だ一日の恩を報ずること能はず。所は何人。一切の男女は胎中に処り、口に乳根を呑ひて母血を飲、香りのみを食すとされ、期間は七日間や四十九日間とする説などがある。「中陰経」は仏が中陰の衆生を集めて説法教化するという内容である。引用部分では、仏と弥勒が、四大洲「仏教的世界観による四つの大陸」と中陰のそれぞれの衆生の特性について質問をしている。四大洲のうち我々の世界である「閻浮提（南瞻部洲）」の人間は、「中陰経」の文脈は「百石讃喫」とは直接関係がない。ただ、乳哺の恩を具体的に数で示す説として知られ

百石讃喫

百石讃喫

百石讃喫

百石讃喫

百石讃喫

百石讃喫
百石讃嘆と灌仏会

（三宝経略注）といわれるように、奈良時代以前の成立であるとするならば、当文は「心地観経」ではあり得ない。成立年代の確定は難しく、「心地観経」が成立である可能性を全面否定することはできない。「心地観経」の出典としていかに考えられるようになり、後世に与えた影響も大きい。早くも、天長五年（八一八）の空海の「為先師講釈梵経証白」（続通照発揮性善集補闊鈔 巻第八）に引用されている。

心地観経」は、最澄撰述とされる。「天台倉華宗牛頭法門要纂」や「一心金剛戒体密決」などの引用されてい。当時の新興勢力である真言・天台の両宗に、最新の漢訳経典として当てはもっていようである。心地観経云。銅性不動。名為実体。鏡明相称。因鏡観性・故曰鏡像。是則当体実相。故立円超銅位鏡像也（天台倉華宗牛頭法門要纂 巻下）。

平安初期におもらく「心地観経」伝来直後に作成された「東大寺讃誦文稿」にも、心地観経からの引用が数箇所認められる。例えば二二三行から二三八行には、「心地観経」報恩品の翻案と考えられるひとまとまりの焼戦所認められる。
文章が書きとめられている。
「誓詞適用」と題され、檀主の両親の追養仏養に使用された文章らしく、亡き父母
への慕情が切々と綴られている。その直後の「三升を寄」には、「百石請願」に酷似する文句が見出される。

百石、八十石、乳房之思、未報上。三千六百日之内守長之恩未完上。

白石、八十石、乳房之思、「音の部分のみではなく、「一夕未報上」とも「心地観経」の
面も未だ一日の恩を
報ずること能はず。前掲引用文並細部に似ており、「心地観経」との関連が推測される。しかし「百石請願」と
は和歌と散文という文体上の大きな隔たりがあるため、相関関係については不明とせざるを得ない。

「百石請願」の要形となる歌が、「中陰経」諸経要集」「法苑珠林」「心地観経」の何れの経典を出処として詠
まれたのかは明らかではない。しかし、平安初期の「心地観経」の流行を想定すると、「百石
請願」は、「心地観経」四恩説によって解釈され、伝承されていていることも、「心地観経」と「百石請願」
が歌われていることとも、「心地観経」の流れを想定すると、平安時代において「百石
請願」をいちはやく受容し
た真言宗や天台宗で「百石請願」が伝承されていることとも、「心地観経」と「百石請願」
歌が歌われたのではなく、法会の主旨からいえば、「百石請願」が歌われるのはむしろ、盂蘭盆会のほうがふさ
わしいのではないかだろうか。盂蘭盆会は周知のように、仏弟子目連が饿鬼道に堕ちて苦しむ亡母を救済した伝説
百石讃嘆と灌仏会

に基づく追善の行事である。

灌仏会は、主に「仏説灌仏像功德経」と「仏説灌仏仏像経」に依拠して行われる。「灌仏像功德経」には、仏像を洗うために十五種の功德と灌仏像の方法が記されている。「灌仏仏像経」は「四月八日灌仏」ともいわれ、四月八日に仏が誕生した由とこの日に仏像を灌仏する利益が述べられている。

今日の賢者某甲、皆慈心好意を為して仏道に信向し、度脱を求めると欲して、種々の香花を持って仏の形像を洗す。皆、七世の父母、五趣親属、兄弟親子、すなわち父母から七世前までの祖先や、近親者たちのために仏像を行うとという。四月八日の灌仏が、仏迦創の生誕を祝賀するのみではなく、追善供養の目的も孕んでいる。

宋書の劉敬宣伝には、敬宣は八歳の時に母を亡くして悲しみに暮れていたが、四月八日に人々が灌仏をするのを見つけて白母のために灌仏し、舅舅の桓玄に孝子と讃えられたという記述がある。亡母追善のための灌仏の例として認める。

四月八日、敬宣見衆人灌仏、乃下頭上金鏡、以為白母。因悲泣不自勝。序喚息、謂呂之曰、卿此兒既為家之孝子、必為国之忠臣。

竹田聡洲氏は、「灌仏仏像経」前掲部に使用されている「七世父母」という語が、仏教と祖先信仰の結合を示す表現であることを指摘している。祖先を示す「七世父母」は、中国では南北朝より造像銘に多用されており。
南北の銘記に現れる「七世父母」追善の文字と思想の典拠として、盂蘭盆経を有力な候補の一つに挙すことである。な

とし、中国における造像と祖先追善の柱は、仏教が支那の儒教的地域に拡張される一の仕方であるが、仏

うと論じている「七世父母」は日本においても、飛鳥時代より、仏教に多用される、上代日本における仏教の受容が「祖

先信仰」という彼我共通の契機が媒介となって、これが、伝来の過程において、改作あるいは増補された部分があ

全相違しておおり、「摩诃利頭経」に「七世父母」は用いられていない。同本異訳に西晋の聖蹟による「摩诃利頭経」

が、西晋の竺法護が泰始二年（二八六年）に漢訳したとされている。

伝来の過程において、改作あるいは増補された部分があ

全相違しておおり、「摩诃利頭経」に「七世父母」は用いられていない。同本異訳に西晋の聖蹟による「摩诃利頭経」

が、西晋の竺法護が泰始二年（二八六年）に漢訳したとされている。
百石讃嘆と灌仏会

四月八日　七月十五日。灌頂当所用。仏語阿難。灌頂仏者。是福願人之度也。各自滅盡宝。賢取珍愛用求度

世之福。当給寺然燈香用作経像。若供養師。施与貧窮。可設齋会。（中略）七月十五日。自向七世父母五

佛は臘日に仏に供物を捧げることをいう。四月八日と七月十五日が並挙されている点に注意が引かれる。四月八日と

孟蘭盆会が最初に移入されたことに一致するのである。「灌頂経」は経像ととも考えられており（仏書解説大詳典）、

灌頂会と孟蘭盆会がともに重視されていたことが窺われる。それが背景には植

先追善の思想があったのでないか。二仏会の日本への伝来に「灌頂経」の影響があったのかどうかは不明だが、

仏教が我が国固有の祖先信仰を基盤に受容されたことを示唆する例として捉えることができる。

我が国の民間行事では、四月八日を「卯月八日」、「ようかび」などと称し、野山から花を摘んできた竹竿の先

に付け、庭先などに高く掲げる「天道花」、「夏花」や、山開きや祭参などさまざまな行事が各地で行われて

いる。農耕の開始期にあたって、田の神である祖霊を山から迎える祭であり、「天道花」は神霊の依りしろの

慣習が各地に残っているのは、初夏の望月を新月としていた古時代の名残りではないかと述べている。

七月の孟蘭盆会のみではなく、四月の灌頂会も民間の祖霊祭の時期に符合していたことが、仏仏会のいちばや

い移入と定着に結びついたと思われる。卯月八日と灌頂会の習合の要因については、万物生成期という時期の一
致
供花が寺院儀礼と民間習俗に共通していることが、灌仏の水向け儀礼が稲田の生育を祈る神事に結び付いたことなどが挙げられているが、祖先供養ということ一致点が特に大きかったのではないか。

伊藤 唯新氏は、祖霊ないしボトケの供養に関する観念も両者の習合を促したものである。すでに飛鳥時代に、つまり仏教の伝来受容期に四月八日と七月十五日に設薬が行われているが、孟蘭盆の行事に取上げられた四月八日は、いわゆる灌仏の行事ではなく、盆と同様に祖先ないし近い死者をまつるためのものであった。

と述べている。伊藤氏は四月八日の『設薬』が「いわゆる灌仏の行事ではない」と推測している。だが、先述したように灌仏形像経の経文によれば、「灌仏会自体が『盆と同様に祖先ないし近い死者をまつるためのもの』でもあったのである。奈良時代の民閒写経に『光覚知識経』と称されるものが、天平宝字五年（七六一）から六年にかけてのもののが二十一巻現在、奥書には計約三百五十名の知識衆の名がみられ、当時の民間仏教の実態を示す史料として注目されている。そのうち、天平宝字六年（七六八）四月八日付け写経が、現在存在する。奈良時代にすでに民間においても仏生日供花が行われたことは明らかである。
四

梁の宗憲撰「荆楚歳時記」の四月八日の項には「灌供会に関する記事がある。」

四月八日、諸寺（谷おの）齋を設く。五色の香水を以て灌供し、

共に灌供会を作し、（以て弥勒を生の徳し

と為すなり）。

「高僧伝」を按するに、

四月八日灌供す。都梁香を以て青色の水を為り、

香を以て赤色の水を為り、

亜香にて黄色の水を為り、

安息香にて黒色の水を為り、

以て仏頂に灌く。

八字の仏、愛に来る。荆楚の人、相承する。四月八日、八字の仏を金城に迎え、

 Written in script
百石譚集と灌仏会

わたりを通していたことを予想させる」と述べている。

灌仏仏像経「摩訶利頭経」には、仏の子、千の孫を求めると欲せば得べしの一節がある。また、灌仏仏像経の後半部には、仏の母を顕護せん。「妻子女産の難有りに安堵なるを

し、右手に宝剣左手中鉢杖を立てた蓮華を携えて描かれる。八支文殊は顕の数から八支文殊とも言われ、息災と調伏を司っている。灌仏仏像経には文殊菩薩の名号が見え、灌仏会に、文殊信仰が潜していたことが推測される。

八支の仏が八大文殊であったという断定はできないが、灌仏仏像経には文殊菩薩の名号が見え、灌仏会に、文殊信仰が潜していたことが推測される。
文殊師利は智恵（般若）を体現する菩薩として、初期大乗経典より活躍している。釈迦三尊像では、普賢菩薩とともに脇侍として配置される。釈迦降誕日の儀礼に文殊信仰も付随していたとしても疑問は感じられない。

「百石讃嘆」の作者と伝えられる行基は、天長五年（八二）に、行基の貧民救済の活動を継承して文殊会が創始された。毎年七月八日に貧者に食事を施給し、滅罪を祈願する法会である。学解を司る菩薩としての信仰とは異なり、文殊は貧者者の姿を仮りにこの世に現れるという信仰に基づいたものである。

文殊会の創始に至って、九世紀において文殊信仰は全国的な広がりを見せ、天台宗では密教系の文殊信仰も振興した。灌仏会と文殊信仰の結びが、文殊信仰の全国的な広がりを見せる。文殊台を宮廷行事化（承和七年、八四〇）と同時代である。行基は、「百石讃嘆」の作者に仮託され、文殊師利大聖尊は、三世の諸仏の母とされる。十九の如来の初めて発心するも、皆文殊師利の力により、皆文殊師利の妙法を印して言はく、「善哉善哉哉」、汝今真に是三世の仏母なり。一切の如来の修行に在るも、皆文殊師利の力による。

爾の時薄伽梵、無量劫中に諸の福智を修行して獲し所の清浄にして決定せる勝法の大妙智印を以て、文殊師利を適時して讃嘆せられ、初めて信心を発せし。是の因縁を以て、十方の国土に正覚を成す者は、皆文殊師利を以て而も其の
百石謡イと滅仏会

報恩品の文句は「往生要集」に引用されている。
大乗三世諸仏、以て母と為す、仏教の力なり一
切世界のものも、仏の名を聞き、身及び光相を見
仏道を成すこと思議し難しと。

もしこの文殊が、文殊を称すること一日・七日ならば、文殊必ず来りたまふ。
（往生要集）巻上、文殊は常に仏家に住、文殊は文殊の力なり。

地観経に縁の深い「百石謡イ」が、行基に仏託されるようになったとも考えることができる。

注

① 心地観経
② 諏生伝
③ 日本歌謡の集 成 第四巻所収。
参考文献

「四国文学講座」第四巻、昭和二十二年二月

高野長兼は短歌体が原型ですが、外来的僧は西京都で元来の短歌体を紹介されたもので、学問のため西京都で短歌体が伝えられ、後の日本へ伝わったものです。
百石譜呂と灌仏会

父母五題親従事の書が読まれているが、当時の我が国仏教教義としては経典の所説を云為してよりは、大陸に於

ける実修を移模して行われるという事情の方が通に有力であったろうと述いている。

古くは失訳とされる類本が伝わっていたらしい（国訳「切経」解題）大正蔵の『灌洗仏像経』は、宋版大藏経に

は「摩訶利頭経」「聖訳」とされていったものを、契丹版大藏経によって「灌洗仏像経」法論読に改めたものである。

勝浦経子「古代における母性と仏教」（季刊日本文化史）第四号、昭和四十二年十二月参照。

寶願寺の敷地を定本とする平安東大寺南院文庫の梵書注「割変規時記」による。「何僧伝」を接するににより、以

て仏頂に灌く。下は階の社土地の注とされる部分。「八字の仏」を受くるににより、以

ての日」として処理がある。

この原稿は、平成十年七月二日成城大学民俗学研究所所長研究例会における口頭発表「百石譜呂と灌仏会」に基づいて執

筆した。数々の有益な教示を頂くことに感謝を表したい。